

村上支署におけるマツ枯れの現状とこれから

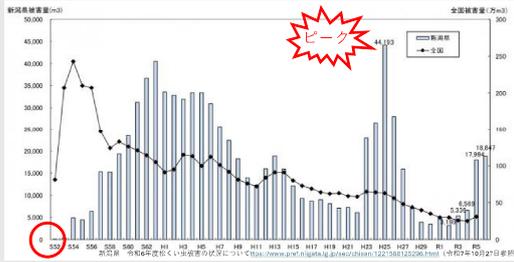
発表者：渡邊 広幸、中島 伸司（下越森林管理署村上支署）

1. 背景と目的

昭和52年に新潟県内で初めて被害の発生を確認。村上では昭和54年に初の被害。

平成25年に被害量のピークを迎える。

その後、被害は減少したが、近年の高温少雨等によりまた増加している。



その原因は...

食害 (媒介)



マツノサイゼンチュウ (高倍率)

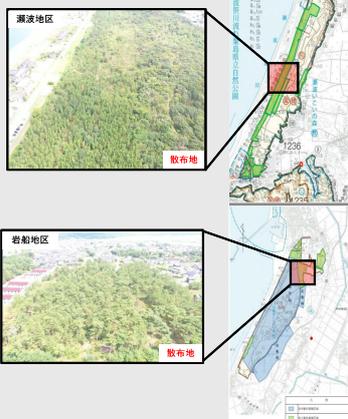


令和5年度、夏季高温少雨(40日降雨なし)によりマツ枯れが国有林、民有林とも被害が増加し、例年の3倍の被害となった。今年度は瀬波地区、岩船地区の両方で前年度より被害本数は減少したが、岩船地区では大径木の感染が多く、岩船地区の被害材積としては増加した。

海岸に面した瀬波地区・岩船地区のマツ林を守るため、地域の方々の協力を得ながら薬剤散布等を実施し、被害の防除を図る

2. 施工箇所について

高度公益機能森林	瀬波地区 60.12ha (令和7年度施工15.62ha) 都市周辺における保健休養機能及び海岸部の防風機能
	岩船地区 172.63ha (令和7年度施工155.59ha) 海岸部の飛砂防備・防風機能及び都市周辺における保健休養機能



3. 防除方法

5月中旬 地上散布

スバウター散布

ホースによる散布

使用薬剤

6月上旬 特別防除 (空中散布)

村上市と合同ヘリ散布

ヘリに薬剤の補充

使用薬剤

1~3月 衛生伐 (伐倒くん蒸)

伐倒、玉切り

くん蒸処理 (集積・被覆の状況)

4. 希少種生息域等での対応



5. 課題とこれから

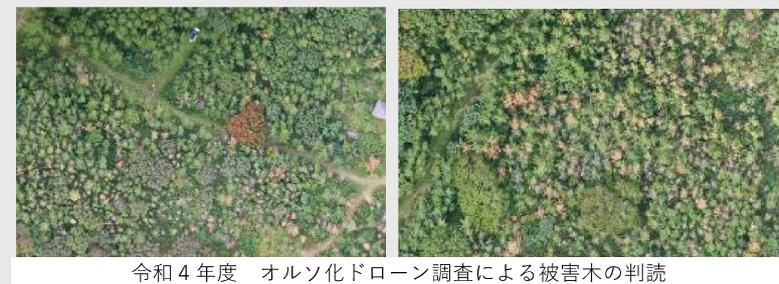
1. 課題

現在の松くい虫被害木調査は、毎木調査によるナンバーテープの貼り付けや樹高、胸高直径の実測が必要である。また、調査木に到着するまでにニセアカシア等が繁茂し、刈り払いが必要な場合が多く、**労力がかかる。** 発注に至るまで、直営による調査、被害木の集計、積算と期間を要する。その間に調査時よりも被害が拡大するおそれがある。その結果、当初の予算が不足し、調整に時間がかかる。被害木処理は適期(10月~5月)に実施する必要があるため、**調査の省力化が必要である。** また、直営による調査実施体制にも課題があり、被害量に対して**調査する者が不足しており**、期間を要する原因の1つになっている。



2. これから

課題であげたとおり、松くい虫被害木調査は多大な労力を要する。そのため、ドローンをはじめとした**ICT技術**の積極的な導入により、調査の**省力化と効率化**をしていくことが重要であると考える。特に、ドローンで調査した空撮画像やデータを**AI**により自動解析することで、調査精度の向上と作業時間の大幅な削減が期待できる。また、取得データをパソコン上の専用システムに取り込むことで、被害木の集計、積算、図面作成に至る一連の作業を**一元的に行えるシステムを確立する**ことが望ましい。



村上市の民有林では、ドローンによる薬剤散布が行われており、実施労力の**省力化**が見込まれ、散布時の**静音性**等の利点から、村上支署でも地上散布で実施しているホースやスバウターによる散布の代替として検討してはどうか。



新工法「木杭根系工法」

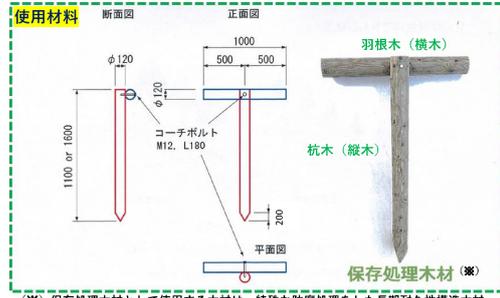
を用いた森林土木工事の可能性について

群馬森林管理署

越井木材工業(株)・(株)コシイプレザービング

1. 新工法紹介 (木杭根系工法とは?)

表層土に1.0m or 1.5mの杭木(長期耐久性構造木材)を打設し1.0mの羽根木を設置して補強・一体化、斜面の安定を図り表層土の崩壊を抑止する新工法



選ばれる森林土木

群馬県フォレスター等民国連携推進連絡会

特徴を踏まえて施工

2. 工事概要及び施工手順(①~⑥)

施工地全景



①使用資機材



②削孔



③杭木(縦木)打込



④羽根木(横木)設置



⑤設置完了



⑥完成



施工結果の共有と普及展開

3. 普及展開

効果的	杭木の摩擦力で表層崩壊を抑止
効率的	多くの資機材や作業スペースは不要
省人化	2週間(3名体制)で完成(40本/日)
経済的	従来工法に比して安価で施工可能
林業振興	木材の利用拡大に繋がる
環境配慮	大規模な掘削・支障木除去を要さない
将来性	当該施工地は群馬県初(全国7箇所目)

共有

施工結果について現地検討会を企画・開催

現地検討会開催

選ばれる森林土木(国有林森林土木工事受注者の現地検討会)とぐんまフォレスター連絡会*1とが共催した現地検討会(令和7年11月19日)では、省力化した施工性を実演披露し、群馬県内の林業関係者に広く新工法をご紹介しました。

参加者からの実践的な質問

質問への回答(趣旨を抜粋)

① 施工実績は?

① 群馬県では初、兵庫、京都、三重、長野、神奈川、秋田(順不同)の7箇所で見積

② 千鳥配置にした理由は?

② 施工地の地形を極力変更せずに現地に合わせて施工するため

③ 斜面に打ち込む長さは?

③ 事前に簡易貫入試験を実施し、土層の最大深を観測した結果、1.5mとした

新工法の施工性と効果性への疑問解消から各地での施工に期待

現地検討会(実演披露)



地元紙「上毛新聞」の取材*2
丸囲いは記者さん



群馬森林管理署HPへ
現地検討会の様子を掲載
サイトへはこちらから



*1 群馬県フォレスター等民国連携推進連絡会 群馬県、森林管理署、森林整備センターの技術職員等が林業・木材産業の振興を図るため、技術交流を通じて市町村支援に取り組んでいます。
*2 現地検討会については、群馬の地元紙上毛新聞(11/20)、林政ニュース(762号・12/3)、日刊木材新聞(12/4)の紙面に大きく取り上げていただきました。

可能性は?

4. 森林土木工事における可能性

- ☑ 防腐処理した杭木の摩擦力が発揮される30年は表層崩壊を抑止!
- ☑ 省力化・省人化から経済的に労働安全性が確保!
- ☑ 木材利用拡大と環境配慮に期待!
- ☑ これまで施工が困難だった奥山崩壊地の拡大崩壊抑止対策に期待!
- ☑ 森林土木工事全般に波及できる可能性に期待!

故に

新工法「木杭根系工法」

民国連携
林業振興
森林土木

あらゆる場面での応用
施工実績の拡大に期待!

BSC工法(土壌藻類)を用いた航空緑化工の現況と考察

山梨森林管理事務所 野呂川治山事業所 地域技術官 渡邊雅弘

1 はじめに

野呂川地区民有林直轄治山事業は、山梨県南アルプス市の西北部、北岳を筆頭とした標高3,000m級の南アルプス連峰の北端に位置する野呂川流域を事業地とし、区域面積は、9,280haと広大なエリアとなっています。(写真1)

昭和34年に発生した伊勢湾台風により、林野庁では山梨県知事から要望を受け、東京営林局直轄野呂川治山事業所(現在の関東森林管理局山梨森林管理事務所野呂川治山事業所)を開設し、昭和34年から事業が着手され、今日まで民有林直轄治山事業を行っています。

☆野呂川流域の変遷

- 昭和34年 伊勢湾台風(台風15号)上陸
- 昭和57年 57災(台風10号)上陸(写真2)
- 令和元年 東日本台風(台風19号)上陸
- 現在 令和12年度概成に向け、事業実行中



↑写真1.野呂川流域



←写真2.57災直後の状況

2 経緯・課題・選定理由

昭和34年より事業を開始しましたが、昭和57年に発生した台風10号により被害が拡大、多くの山腹崩壊が発生し溪流は荒廃しました。特に山腹の崩壊規模は大きく、復旧には時間的・技術的にも困難を極めました。

山腹崩壊・渓床荒廃の復旧は山腹工・溪間工によって行われましたが、到達困難地や施工不可能地にはヘリコプターによる緑化も行われてきました。

この間復旧は順調に行われてきましたが、令和元年度に発生した台風により小樺沢付近の山腹が大規模に崩壊しました。崩壊規模は約6.00ha、流出土砂量は54万m³。発生した土砂はこの間整備した治山ダムにより野呂川本流への到達は阻止したものの、山腹の復旧や小樺沢に堆積した不安定土砂の対応など復旧計画は非常に難しいものとなりました。渓床内の不安定土砂は一部を排土しながら、ダム工に利用することを検討しておりますが、山腹崩壊については以下のような課題がありました。

- ①資材等の運搬 → 崩壊地まで深い沢形状で蛇行しているため、ケーブルクレーン・モノレール等の運搬手段の架設や作業員のアクセスも崩壊規模から、安全性が担保されないため困難。
- ②緑化資材の規制 → 現地は自然公園の特別地域に指定されており、一般的な種子等が入った緑化資材が使用不可なため、早期緑化による復旧が見込めない可能性が高い。

以上の課題を解消するため、①に関してはヘリコプターによる上空からの施工、②に関してはBSC工法(土壌藻類)を使用した土砂移動抑制・法面保護による緑化の推進が本施工地においては適当と考え、工法を選定しました。

☆BSC工法とは？

正式名称は、「バイオロジカル・ソイル・クラスト」といい、糸状菌類、土壌藻類、地衣類および苔等が地表面の土粒子や土塊を絡めて形成するシート状の土壌微生物のコロニーを活用した表面侵食防止技術です。

これにより、植生の生育基盤である表層土壌が安定することから、在来の周辺植生の侵入が促進され、植生の早期復旧を促します。従来の植生資材と違い、法面整形無しでも施工可能となっています。

また、施工の際は、BSC-1(写真3)、侵食防止剤、植生基材(ファイバー)、肥料、水、場合によっては粘着剤・着色剤を攪拌タンクに投入して攪拌した後(写真4)、吹付・散布を行います。

本工法は、世界中に存在する土壌藻類を利用することで、在来種等への環境に対して影響を回避でき、クローン増殖なため遺伝子攪乱等を起こさないことから、自然公園等の環境規制が厳しいエリアでも施工を行うことが可能です。

そのほか、奥山の崩壊地や山火事跡地にも施工実績がある工法となっています。



写真3. BSC-1(土壌藻類)



写真4. 攪拌後の散布資材

☆ヘリコプターによる緑化とは？

航空緑化工、航空実播工といわれる施工方法であり、大面積又は散財的に発生した崩壊地を応急又は緊急に緑化する必要がある場合、資材運搬手段が困難な場合等に行います。

施工地近辺にヘリポートが必要なことや、電線等の架線の影響がないか等の制限はありますが、人の手が届かない奥地や、大面積の崩壊地を短期間で施工することができ、緑化を図ることが出来ます。

手順としては、①散布する緑化資材をバケツに投入し(写真5)、ヘリコプターで吊り上げ、施工地まで運搬、②工事施工地でバケツを開け、緑化資材を散布(写真6)、③①と②の作業を繰り返す方法となっています。



写真5. バケツへの投入状況



写真6. ヘリによる散布状況

3 航空緑化工(土壌藻類)の施工後の現況・考察

全体面積6.00haのうち、約2.45haについて、令和7年5月19日~21日の3日間にわたり航空緑化工を行いました。

散布してから半年程が経過しましたが、崩壊地の上部(岩部)については藻の定着が進み、植生基盤が形成されているのが確認できます(写真8)。この変化は、土壌浸食が抑えられる兆しであり、森林復旧に向けての第一歩が見られているところです。しかし、土質等の関係により、土砂部においては藻の定着が遅れているのも確認されています。

BSC工法自体が新しい工法(国有林においては令和3年度に初施工)であることから、今後、施工の実績を増やすことが出来れば、現場に応じた粘着剤や肥料の種類、配合の検討が進められ、より一層安定した緑化が行えるようになるものと思慮します。

当地については今後も、経過観察を続けていき緑化状況を確認していきます。



←写真7. 施工前の施工地(7.5.19撮影)

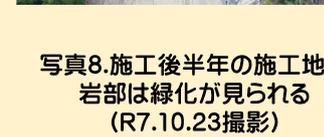


写真8. 施工後半年の施工地→岩部は緑化が見られる(7.10.23撮影)



【芝浦創造の森】におけるグリーンスクールの取り組みについて

会津森林管理署南会津支署
芝浦工業大学柏中学校
南会津森林組合

(発表者)
地域技術官 伊藤 秀明
主事(経営) 田中 友希

1. はじめに (芝浦創造の森について)

▼【芝浦創造の森】は平成20年に学校法人 芝浦工業大学と会津森林管理署南会津支署が契約を締結した分収造林です。植林から今日に至るまでグリーンスクール(森林教室)の活動として南会津支署及び南会津森林組合の指導のもと芝浦工業大学柏中学校の生徒の手によって手入れが行われ、健全な森へと成長を続けています。

分収林所在地	福島県南会津郡南会津町 湯ノ花字新道澤国有林 1019㊦9林小班	 <p>写真1.【芝浦創造の森】</p>
分収林面積	0.9129 ha	
契約者	学校法人 芝浦工業大学	
契約期間	平成20年5月19日から 令和45年5月18日まで	
植栽樹種	スギ	
植栽本数	2,739本(3000/ha)	



2. グリーンスクールの活動記録

H20年



- 分収造林契約締結
- 柏中学校第10期生により植林される

H21年
~
H24年



- 雪起こし
- 【芝浦創造の森】看板が設置される

H25年
~
H27年



- 裾枝払い
- 倒木起こし
(雪圧により傾斜した立木を縄で起こす作業)

H28年
~
R元年



- 裾枝払い
- コロナウイルス流行の為、令和2年から令和4年まで一時活動休止

R5年
~
R7年



- 裾枝払い
- 枯損木の除伐

【写真提供: 芝浦工業大学柏中学校】

3. 関係団体の取組みについて

芝浦工業大学柏中学校

- 【芝浦創造の森】を教材とした授業の展開
- 文化祭でグリーンスクールについて生徒によるプレゼンテーション発表



南会津支署

- グリーンスクール活動報告を南会津支署ホームページに掲載
- 森林調査の実施



南会津森林組合

- グリーンスクール実施前の作業道具の点検、現地確認及び安全点検
- 危険木伐倒、下草の刈払い
- 危険個所のテープ標示



4. 南会津支署の取組み (森林調査について)

① 調査目的

- 森林の育成状況と森林被害の確認

② 調査方法

- OWL(地上型3Dレーザ)による標準地2箇所の立木調査
- 森林被害の目視調査

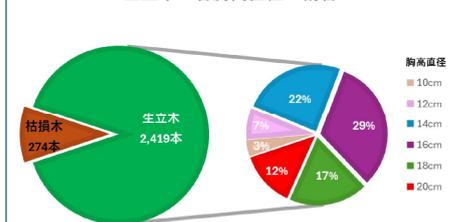


③ 調査結果 (令和7年12月調査、林齢:スギ18年生、標準地面積合計0.02ha)

胸高直径(cm)	標準地①(10m×10m)		標準地②(10m×10m)		合計(①+②)	
	生立木(本)	枯損木(本)	生立木(本)	枯損木(本)	生立木(本)	枯損木(本)
8				1	0	1
10		1	2	1	2	2
12	2		2	2	4	2
14	5		8	1	13	1
16	11		6		17	0
18	6		4		10	0
20	7				7	0
小計	31	1	22	5	53	6

図2. 標準地調査結果表 面積拡大係数: 45.645 (0.9129ha/0.02ha)

生立木の各胸高直径の割合



- 小班全体の推定本数⇒ **2,693本(生立木2,419本、枯損木274本)**
- 生立木の約6割が胸高直径16cm以上⇒ 会津森林計画区収穫予想表の平均胸高直径13cm(地位級2、IV齢級)と比較して良好な育成!

- 【参考資料: 第6次国有林野跡地実施計画(会津森林計画区)、森林調査簿(会津森林計画区)】
- 標準地②では枯損木が多い⇒ 風雪による被害を受ける箇所であると確認
- 獣害等による立木被害は見られなかった⇒ 立木被害未然防止対策の検討

④ まとめ (グリーンスクールの今後について)

- 森林調査から【芝浦創造の森】が良好に育成している事が確認できた。
- 関係団体に森林調査結果を共有し、引き続き枯損木の除伐を実施すると共に、生立木については新しい活動の実施を協議して今後のグリーンスクールをブラッシュアップしたい。



林業における労働災害の未然防止について ～現場から学ぶリスクアセスメント～

天竜森林管理署 森林技術指導官 小田嶋信宏

【背景】 森林資源が充実し伐期を迎えるなか、林業の生産現場における労働安全の確保はこれまで以上に重要性を増している状況であるが、林業特有の作業現場の複雑性や担当者の経験不足等により重大災害の発生リスクが高くなっている。生産現場で危険性を低減させる手法としてのリスクアセスメントは、危険を読み、災害の芽（リスク）をつむぐために効果的であることから、災害に至る危険因子を取り除いて、災害が生じない安全な職場環境にするため、林災防静岡支部にご協力いただき現場に即したリスクアセスメントの実践を行った。

【リスクアセスメントの必要性】

① リスクアセスメントとは

リスクとは	作業現場の危険性によって生じる、作業者の怪我の「重大さ」と発生する「可能性」のレベル
アセスメントとは	作業現場のリスクを見積り、評価すること

② 参加者

	リスクの特定	リスクの見積	措置の検討	措置の決定
チームリーダー	○	○	○	○
チームメンバー	○	○	○	○
プランナー	○	○	○	○
経営管理者	△	△	△	○

○ 必ず参加 △ 必要に応じて参加

③ 期待される効果

- 作業現場のリスクが明確になる
- リスクを感じる力が養われる
- 安全対策の優先順位が決定出来る
- 属人的な安全対策からチームワークによる安全確保となる
- 残留リスクに対して、「守るべき決め事」の理由が明確になる

皆で見ても、話し合っても決めて情報共有する

【リスクアセスメント実習】

- 作業範囲 地形 地質 植生 沢 水源 障害物 立木状況 作業基準 アクセス 携帯電波 緊急時対応

どれだけたくさんの方に気付けるか

地図との対応が分かるように写真を撮っておこう

注：イメージであり、実際の現場調査結果ではありません

④ リスク評価～現在と対策後

危険状態が発生する頻度	危険状態が発生した時にケガに至る可能性	重大なケガの起こる可能性	総点数	リスクレベル	作業の可否
頻発 4点	確実である 6点	確実である 10点	24~240	Ⅲ	作業不可
ときどき 2点	可能性が高い 4点	可能性が高い 6点	4~23	Ⅱ	リスク低減措置を講じながら作業可
めったにない 1点	可能性がある 2点	可能性が低い 3点	1~3	I	作業可
	ほとんどない 1点	ほとんどない 1点			

④ 総(リスク)数 = ①頻度 × ②ケガに至る可能性 × ③重大なケガの可能性

⑤ リスクアセスメント見積・評価シート

記入日 年 月 日 記入者

① 危険状態が発生する頻度
頻発 4点、ときどき 2点、めったにない 1点

② 危険状態が発生した時にケガに至る可能性
確実である 6点、可能性が高い 4点、可能性がある 2点、ほとんどない 1点

③ 重大なケガの起こる可能性
確実である 10点、可能性が高い 6点、可能性が低い 3点、ほとんどない 1点

④ 総(リスク)数 = ①頻度 × ②ケガに至る可能性 × ③重大なケガの可能性

作業内容	リスク	手続内容	危険予知活動		リスク評価		作業の可否	
			個人	グループ	現在	対策後	現在	対策後
作業内容	リスク	手続内容	個人	グループ	現在	対策後	現在	対策後

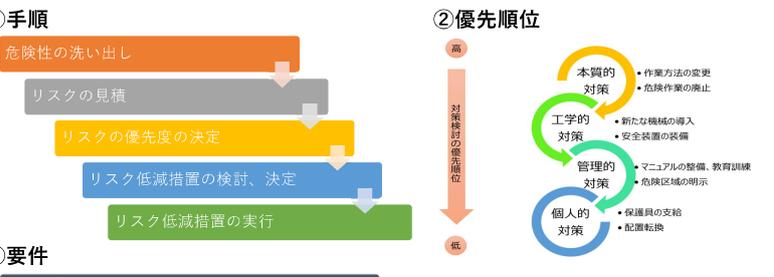
① 現地踏査 (危険因子の洗い出し及び作業計画に反映)



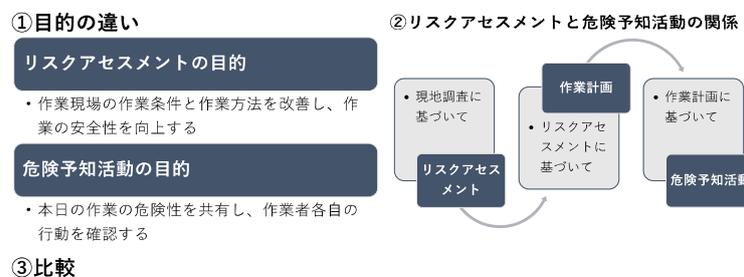
② 現地の整理及びリスク評価



【リスクアセスメントによる作業条件の改善】



【リスクアセスメントと危険予知活動の違い】



【まとめ】

山を実際に歩くことで多くのリスクが潜んでいることが実感できた。現場ごとに条件が様々であり、現場ごとのリスクアセスメントが重要ということが理解できた等の意見が参加者から寄せられた。今後、各林業事業体内で安全対策の情報共有やリスクアセスメントの徹底により、職場全体の危険に対する意識向上を高めて無災害の輪を広げていくことを目標に、引き続き実践的な取組を進めていく。

IV 講評及び審査結果

— 審査員講評 —

審査員長 森林総合研究所 植物生態研究領域長 荒木 眞岳

皆さま大変お疲れ様でした。この2日間にわたり、森林技術部門が9課題、森林保全部門が4課題、森林ふれあい・民国連携部門が2課題、特別発表が4課題、合計で19課題のスライド発表がありました。

まず、最優秀賞は課題番号 S15「不法侵入への挑戦～林道の安全対策～」です。この発表は、審査員がつける得点でも2位を若干引き離して1位を獲得し、審査会でも満場一致で文句なく最優秀賞でした。理由としましては、不法侵入という目の前にある切実な問題に対して、現場でできるところからコストをかけずに大変効果的な対策をされた点が、高く評価されました。また、取組過程においても、自分達でできる努力だけではなくて、警察と連携するなどの対策を行った結果、目に見えて不法侵入が減ったということを示した点も効果がわかりやすくよかったと思います。このような取組は、すぐにでも関東森林管理局内の他の署や事務所で取り組める対策ですので、まさに今回の森林・林業技術等交流発表会にふさわしい発表だったと思います。

次に優秀賞です。優秀賞は4点ありました。まず森林保全部門からは、課題番号 S11の「奥日光西ノ湖畔に平成11年に設置したシカ柵内の25年後の植生変化」です。この発表も、審査員の中で大変評価が高かったものになります。その理由は、国有林だからこそできる、長期にわたる観測であるという点です。これまではシカの被害対策を主に取り組まれていましたが、今後はナラ枯れという新しい難敵が目の前まで迫ってきており、その対策も必要とのことでした。一人の職員による熱意が25年間続いたことに感銘を受けました。今後も、引き続き対策を行っていくことを期待しています。

森林ふれあい・民国連携部門からは、「地域と連携した金尾山の森林づくり～第75回全国植樹祭機運醸成の取組～」です。この発表は、全国植樹祭が66年ぶりに行われることとなり、令和7年度に行う植樹祭に向けて新たなイベントを計画し、実行した過程が非常によく伝わってくる、わかりやすい発表だったと思います。さらに、地域住民を巻き込み植樹祭を行ったという点も評価されました。

森林技術部門から、課題番号 S6「大苗植栽による下刈り省略の検証試験」と S9「下刈りの機械化のための自走式下刈り機による地拵えに関する検証」がそれぞれ優秀賞を受賞されました。「大苗植栽による下刈り省略の検証試験」では、大苗を植えて5年間無下刈りにおいても、スギは2m以上に成長するという点を、現場の植栽で示した点が、評価されました。

「下刈りの機械化のための自走式下刈り機による地拵えに関する検証」では、自走式の下刈り機械を使い、地拵えを行ってから植栽をしましたが、今後は下刈り機械が走るルートを事前に想定して、伐採などの作業を行う必要があるという視点が大事だったと思います。今後は、綺麗に地拵えした場合の環境への影響評価や、列内に残った雑草木の対処が課題だと思いますので、引き続き取り組んでいただければと思います。

また、民国連携賞では、課題番号 S10「くくりわなによるシカ捕獲の2地点比較（伊豆半島と箱根・丹沢地域）」を選定いたしました。研修で出会った若い2人が意気投合したところから始まっ

た点が評価され、国と県がそれぞれでどのような対策を行っているのか、お互いに現地検討し合い意見交換をした点も、斬新な取り組みとして評価されました。また、目的を見失っているのではないかと、という身内に対する鋭い指摘も印象的でした。

技術普及賞では、課題番号 S4「コンテナ苗木の生産技術向上に向けた取組」が受賞されました。群馬県の担当者が県内の苗木生産者を連れて栃木県に出向き、苗木生産技術についての技術検証を行ったというご発表でした。自分達だけではなかなか解決できない問題について、周囲の対処方法を研修や情報交換によって得ることは、技術普及に直接つながる取り組みだということで評価されました。

最後にポスター発表についてですが、今回、群馬県の高標高域にコウヨウザンを植えたがよく成長しなかった、急傾斜で防草シートを貼ってみたが防草効果はよくなかった、というようなご発表が見られました。このような、失敗した事例、上手くいかなかった事例を皆さんの中で共有しながら交流することは非常に大事だと思います。例えば、近年、主伐採造林が推進されていますので、下刈りの問題など、一生懸命に皆さんも我々も含めて取り組んでいます。50年前、60年前は拡大造林の最中でした。当時も、地拵えをして、木を植え、今より大変な下刈りを行ってきたわけですので、時代は巡っています。今、我々が考えていることは、50年前の人達も同様に考えていたはずで、先人が残した多くの資料が関東森林管理局にはあると思いますので、温故知新の精神で紐解いてみると、なんらかのヒントが得られるのではないかと考えています。

以上で私の講評を終わらせていただきます。お疲れ様でした。

令和7年度 関東森林管理局森林・林業技術等交流発表会 受賞結果

〇スライド発表

最優秀賞 1 課題

不法侵入への挑戦～林道の安全対策～

群馬森林管理署 石栗 英人さん、北澤 寛さん

優秀賞 4 課題

< 森林技術部門 >

大苗植栽による下刈省略の検証試験 第2報

矢板市農林課 市川 貴大さん

塩那森林管理署 金澤 裕子さん、伊藤 香里さん

下刈りの機械化のための自走式下刈り機による地拵えに関する検証

合同会社ビスペル 馬渡 純さん

静岡県富士農林事務所 辻 菜緒さん

< 森林保全部門 >

奥日光西ノ湖畔保護林に平成11年に設置したシカ柵内の25年後の植生変化

日光森林管理署 野口 光三さん

< 森林ふれあい・民国連携部門 >

地域と連携した金尾山の森林づくり～第75回全国植樹祭機運醸成の取組～

埼玉県寄居林業事務所 浅香 義広さん

民国連携賞 1 課題

くくりわなによるシカ捕獲の2地点比較（伊豆半島と箱根・丹沢地域）

伊豆森林管理署 藤垣 遼大さん

神奈川県自然環境保全センター 小澤 海斗さん

技術普及賞 1 課題

コンテナ苗木の生産技術向上に向けた取組

群馬県渋川森林事務所 星野 勝さん

○ポスター発表

総合優秀ポスター賞 1 課題

新工法「木杭根系工法」を用いた森林土木工事の可能性について

群馬森林管理署 竹之内 政勝さん、上村 武士さん

越井木材工業株式会社 清水 賢さん

株式会社コシイプレザービング 壁野 宏司さん

優秀ポスター賞 2 課題

地域資源の有効活用に向けて～広葉樹につつまれたなら～

日光森林管理署 小松 玄季さん、本村 颯己さん

希少野生生物の保全と森林施業の両立に向けて～瀬尻ホソバシャクナゲ稀少個体群保護林での取組～

天竜森林管理署 弓桁 侑季さん

計画課 砂原 美咲さん

特別賞 3 課題

群馬県北部におけるコウヨウザンとスギの成長比較」

利根沼田森林管理署 野宮 陸さん、田中 直己さん

OWL 調査プロットについて～撮影時期の違いによる比較検討～」

下越森林管理署 熊丸 慧さん

機関連携による鬼怒沼湿原（奥鬼怒生物群集保護林）でのニホンジカ対策

栃木県林業センター 丸山 哲也さん

環境省日光国立公園管理事務所 吉川 美紀さん

日光森林管理署 野口 光三さん

令和7年度 関東森林管理局森林・林業技術等交流発表会 審査員

審査員長	国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所 植物生態研究領域長	あらかき まさたけ 荒木 眞岳
審査員	林業コンサルタント（木こりの女房）	あらかわ みさほ 荒川 美作保
審査員	一般社団法人日本森林技術協会 技術指導役	おちあい ひろたか 落合 博貴
審査員	NHK 前橋放送局長	くにひろ あけみ 國廣 明美
審査員	群馬県森林組合連合会 総務部長	たかはし のぶゆき 高橋 伸幸
審査員	山梨県森林総合研究所 特別研究員	ながいけ たくお 長池 卓男
審査員	関東森林管理局 次長	もりやま まさと 森山 昌人

※所属・役職名は発表会当時のものです。

順不同 敬称略

関東森林管理局 発表会の沿革

開催年度	前橋営林局	東京営林局	主な出来事（林政及び一般社会情勢）
1949 (S24) 年度			1947(S22)年：林政統一（国有林野事業特別会計の開始）、カスリーン台風
1954 (S29) 年度			1954(S29)年：洞爺丸台風
1959 (S34) 年度	造林技術研究発表会 ↓ 林業技術研究発表会 [経営部門] 林業技術研究発表会 [事業部門]	技術研究発表会 [経営部門] ※不定期 技術研究発表会 [事業部門] ※不定期	1957(S32)年：国有林生産力増強計画 1958(S33)年：狩野川台風 1959(S34)年：伊勢湾台風
1968 (S43) 年度			1963(S38)年度：第10回目開催
1969 (S44) 年度			1964(S39)年：東京五輪開催、林業基本法制定
1971 (S46) 年度	林業技術研究発表会 [経営部門] 林業技術研究発表会 [事業部門] ↓ 林業技術研究発表会		1970(S45)年：大阪万博開催 1973(S48)年度：第20回目開催「国有林野における新たな森林施業」（公益的機能の両立）
1976 (S51) 年度	林業技術研究発表会 ↓ 業務研究発表会	業務研究発表会	1980(S55)年：山元立木価格が最高値 1983(S58)年度：第30回目開催 1986(S61)年：バブル景気（～1992）
1999 (H11) 年度	関東森林管理局	東京分局	1993(H5)年度：第40回目開催 1995(H7)年：阪神・淡路大震災 1999(H11)年：営林局・署から森林管理局・署へ名称変更
2001 (H13) 年度	業務研究発表会 ↓ 業務・林業技術等発表会	首都圏林業技術交流発表会	2001(H13)年：森林・林業基本法の制定 2002(H14)年：木材自給率が過去最低値 2002(H15)年度：第50回目開催 2004(H16)年：東京分局廃止
2004 (H16) 年度	関東森林管理局		
2005 (H17) 年度	開催無		
	業務・林業技術等発表会		
2012 (H24) 年度	森林・林業技術等発表会		2011(H23)年：東日本大震災
2013 (H25) 年度			2012(H24)年度：前橋テルサで開催（運営・進行等も委託） 2013(H25)年度：前橋テルサで開催（職員運営）、国有林野事業特別会計廃止
	森林・林業技術等交流発表会		2014(H26)年度：第60回目開催
			2019(R1)年度：ポスター発表開始、森林経営管理法施行 2020(R2)年度：Web開催（COVID-19対策）、ウッドショック
			2021(R3)年度：Web開催、東京五輪開催 2022(R4)年度：Web開催
			2023(R5)年度：対面開催再開、オンライン配信併用
			2024(R6)年度：第70回目開催
			2025(R7)年：大阪・関西万博開催

令和8年3月発行

令和7年度
森林・林業技術等交流発表集
第69号

編集・発行：関東森林管理局技術普及課

〒371-8508

群馬県前橋市岩神町4-16-25

TEL 027-210-1176